

兼六園と辰巳用水

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

浅 野川を天神橋までさかのぼり、そこから川沿いを離れて兼六園へ向かうことにした。途中、松山寺という立派な石垣をもつ寺があり、門前のわきの道は八坂というかなりの上り坂で、その側溝は水量が豊富な急流となっている。この坂の上が兼六園だから、どうやらこれは辰巳用水から流れ落ちていようだ。

加賀百万石の金沢城と、今も観光客が押し寄せる兼六園は、浅野川と犀川に挟まれた小立野台地の先端に築かれた。両者の位置関係は、金沢城が台地の最先端にあり、かつての堀跡であるお堀通をはさんで、兼六園があるといった具合になっている。

さて、まずは兼六園にとって非常に重要な辰巳用水から触れてみたい。

台地の上に建てられた金沢城は水利が悪く、城の周りには百間堀などの堀があったものの、水の無い堀堀か、それに近い状態だった。そのため市街は火災に弱く、寛永八（一六三一）年四月、犀川大橋詰にある法船寺門前からの出火によって、金沢城をはじめ城下の大半が焼けてしまった。そして、この火事をきっかけにして、防火対策用の水をひくこととなり、翌九年に辰巳用水の掘削工事が開始され、一〇キロほど離れた上辰巳地内から取水することにな

った。辰巳用水の名は、取水地が金沢城の東南、つまり辰巳の方角だったことによる。

江戸時代初期に開削された用水路の中でも優れた技術が導入され、たとえば取水口から小立野台地に至るまでは、約三キロにもおよぶ導水トンネルが掘られており、金沢城を囲む堀の下を潜らせる際には、高低差を利用して逆サイフォンが用いられている。そして、このように高度で大規模な工事だったにもかかわらず、一年ほどの短期間で完成された。

次に兼六園だが、辰巳用水完成より四〇年ほど後の延宝四（一六七六）年に、五代藩主の前田綱紀が蓮池御亭という別荘を建てたことにはじまり、十三代藩主斉泰まで二〇〇年の歳月をかけて作庭された。ただし、ずっと作り続けていたわけではなく、代々の藩主が折々に抜けて現在の姿となった。

兼六園の名は、「寛政の改革」で有名な松平定信が「洛陽名園記」の句から文政五（一八二二）年に名付けたと伝わる。その大意は「優れた庭園に兼ね備えられないものが六つある。広さを求めれば風情は薄れ、人工が勝れば趣が少ない。水泉が多ければ眺望が無くなる」。この相反する宏大、幽邃、人力、蒼古、水泉、眺望を兼ね備えているという意味だ。そして、一一万四、〇〇〇平方メートルという広大な敷

地を茫漠とせず、名園に不可欠な要素の多くを生み出しているのが、園地をめぐる曲水をはじめ、霞ヶ池や瓢池などの景観を作り出した辰巳用水だ。兼六園に流入する辰巳用水は、生活排水による汚染をふせぐため、大正十一（一九二二）年から写真の開渠部分ではなく専用の地下水路をたどっているが、いずれにしても四〇〇年も前に建設された辰巳用水は、今も滔々と流れて金沢の名園を潤している。



辰巳用水 兼六園の小立野口付近

[交通] 浅野川の天神橋から徒歩約30分